

ハートライフ病院が発行する医学生と研修医のための情報誌

LIFE



患者さんやその家族に
しつかり寄り添い、
すべての命に真摯に向き合う
ハートライフ病院。

患者さんやそのすべての命に真

今回のドクターズ・スペシャルトークは産婦人科をフィーチャー。妊娠や分娩などの周産期や婦人科腫瘍、生殖内分泌、更年期のヘルスケアなど、女性の一生を通したさまざまな領域があります。特に分娩では、産婦人科医と助産師、看護師が連携し、協力しながらチームで医療自身の初期臨床研修時代や新人時代、子を持つ親としての経験を含め、小さな命に真摯に向き合う姿には胸が熱くなります。

「この病院で産婦人科医になりたい」
初めてそう思ったのがハートライフでした

——今日はご自分の研修医時代や新人時代を振り返っていただき、現場で感じたことなどを気軽にお話いただけたらと思います。初期臨床研修でハートライフ病院を選んだ理由や入職を決めた経緯などを教えてください。

比嘉：ハートライフを初期研修先に選んだのは、まずは家から近かったからです（笑）。

宮崎：え？ 本当ですか（笑）。でも近さも大事ですよね（笑）。僕はハートライフの規模とか研修医の数とか、バランスがちょうどよかったです。すごい症例もある程度経験できるし、当直明けも考慮してもらえてしっかり休める。全体的にいいなと思いました。

比嘉：私は元々放射線科志望だったんですけど、研修医2年目の時にハートライフ病院の産婦人科を回ったら、想像よりずっと楽しかったんです。ちょうどテレビドラマで産婦人科医が主人公になった「コウノドリ」も人気で憧れもありましたね。

宮崎：僕は初めは整形外科や形成外科を考えていたんですが、そんな時に研修で知り合いになった大学の2つ上の先輩である比嘉先生に「産婦人科



みやざき ゆうき
宮崎 優樹 医師

長崎県出身。33歳。琉球大学医学部卒。2018年、ハートライフ病院初期臨床研修修了。同年4月より友愛医療センターにて産婦人科専門研修プログラムに所属。同年4月～2019年5月、ハートライフ病院にて専門研修を行う。2019年6月～2020年12月、友愛センターにて専門研修を行う。2021年1月～3月、ハートライフ病院にて専門研修を行う。同年4月、ハートライフ病院産婦人科へ入職。日本産婦人科学会専門医。医師7年目。既婚で2児の父。

家族にしつかり寄り添い、 摯に向き合うハートライフ病院。

を行います。



ひが ひろか
比嘉 博香 医師

北谷町出身。33歳。琉球大学医学部卒。2016年3月、ハートライフ病院初期臨床研修修了後、同年4月、産婦人科へ入職。2018年7月～12月、山口大学附属病院産婦人科にて研修。2019年1月、ハートライフ病院産婦人科勤務。日本産婦人科学会専門医。医師9年目。既婚で現在、第2子妊娠中。2023年3月頃より、産休および育児休暇を取得する予定。

がなは みほ
我那霸 美帆 看護師

埼玉県出身。45歳。2000年3月、国立東京医療センター附属東岡看護助産学校看護科卒業。2001年3月埼玉県立大学短期大学部助産学専攻科卒業。同年4月、国立成育医療センター（旧国立大蔵病院）入職。同院退職後、2005年9月よりハートライフ病院入職。2022年4月より師長に就任し現在に至る。既婚で4人の子を持つ母。

Interview

に来ない?」と誘われたんです。

比嘉: そうそう。誘ったね。産婦人科の先生をなんとか増やしたいと思って。あとは、私が産婦人科医を選んだ年は産婦人科志望は県内でも2、3人しかいなくて、「産婦人科医の方が病院から必要とされるはず」という思いもありましたね。

宮崎: 最終的にどこにしようか悩みましたが、産婦人科でも開腹手術のようなダイナミックな外科手術ができるなと思って。あとはやっぱり比嘉先生に産婦人科の魅力を語られたのが大きかったです。

比嘉: しぶとく誘ってよかったです～(笑)。

一同: (笑)

比嘉: 「家から近かったからです」というのは半分冗談で(笑)。ハートライフへの入職はここで研修を受けた時に初めて「産婦人科医になりたい」と思ったからです。学生の時に琉大や他の病院で産婦人科を見学したり研修したりしたことはありますが、その時は正直産婦人科に行きたいとは思えませんでした。

宮崎: それ、わかります!僕も他の病院よりハートライフの方がなんだか居心地がよくて。産婦人科センター長の武田先生や他の先生方もみなさんすごくアットホームですよね。

比嘉: そうそう。風通しがいいというか、上の先生とも話しやすい気がします。あと、私の入職時は産婦人科のドクターがとても少なくて、即戦力になれない研修医の私ですら「居てくれて本当に助かる」という雰囲気で必要とされているなと感じました。

宮崎: 我那霸師長は埼玉のご出身ですよね。ハートライフを選ばれたのはどんな理由なんですか?

我那霸: 私は沖縄に嫁いで来て、助産師として働きたいと思っていくつか病院を見学したんですけど、ハートライフが家から近かったですし、母児同室をしていると聞いて、ケアに共感できると思ったんです。



比嘉: 我那霸師長はどうして助産師になろうと思ったんですか?

我那霸: 実は中学校の性教育の時間に、本当の出産シーンを観る機会があったんです。命が生まれて来る瞬間にすごく感動したのがきっかけですね。それまではロックやファッションが好きで、一生懸命おしゃれをするような中学生だったんですけど、流行ってコロコロ変わるし、追いかけていてもきりがないって気が付いてしまって。何か普遍的に繰り返されていて価値観がブレないような仕事を求めていた時に、助産師という仕事と衝撃的に出会い、目指すことにしました。



——研修医時代や新人助産師時代に、何か思い出深いエピソードなどがありましたら、教えてください。

比嘉：救急当直の初日に救急外来を受診した患者さんの酸素飽和度がどんどん悪くなっている、心肺停止になりそうなぐらい急変したんです。頭ではすぐに何か対応しないといけないって分かってるんだけど、何をしていいか分からないし、動けない状態になってしまって。そうしたら上の先生に「やる気がないなら帰れ」って言われて悔しくて悔しくて。帰ってしまおうかと思ったけれど、ベテランの看護師さんが「そんなことないよね、先生も頑張ってる

もんね」と優しくフォローしてくれたんです。それがあったから今も医者を続けられているかもしれません。その人がいなかつたら、もう帰っちゃってたかもしれません。

宮崎：僕は初期研修中の2年目の時、夜間に救急の当直をしていたら産婦人科で生まれた新生児の容態が急変して、NCPRを行ったんですけど、結局助からなかった。やっぱりショックでした。産婦人科になろうと決めていたんですが、研修中にそんなことがあって少し気持ちが揺れました。ただ、その2年後ぐらいに、その患者さんが再度妊娠されて分娩があって。元気な赤ちゃんを見届けられました。

我那霸：私は助産師になってまだ2年目ぐらいの東京時代に、心臓の発達が不十分で、生まれても助からないかもしれない胎児治療中の赤ちゃんの分娩に携わったんです。親御さんは「この子の持っている命で十分です」と希望して、帝王切開ではなく経産分娩を選ばれました。分娩中に亡くなるかもしれないという説明もされていたんですけど、それでも構わないと立ち会い出産をされました。そうしたら、その赤ちゃんは心音も下がらずに正常な状態で産まれて来てくれました。産声を上げないだろうと思われていたんですが、ちゃんと泣いてくれて、生後36時間ぐらいして、お母さんの胸の中で息を引き取りました。

宮崎：精一杯生きたんですね。

比嘉：本当にそうだよね。

我那霸：分娩の際に赤ちゃんの目から涙があふれていて、目が合った気がしたんです。そのことにすごい衝撃を受けて、「この子は生きたかったけど生きられなかったんだ」と思ったら、助産師の仕事をもっと真剣にやらなくちゃ、その子に申し訳ないって思うようになったんですね。決意を新たにしたというか。

——みなさんそれぞれが命に真剣に向き合った瞬間があって、その積み重ねが今につながっているんですね。

Interview



医療従事者としてはもちろん 親や家族の視点からも患者さんに寄 り添う

———1日の主な業務やスケジュールはどのよ
うになっていますか？

比嘉：朝は大体8時半までには出勤し、午前か午後、
週に3～4回ぐらい外来を担当して、外来のない
日は、初期の子宮がんや帝王切開などの手術が入
ります。分娩があったら随時対応するといった感



じですね。

宮崎：診療は17時半までで、1か月で大体40～
50人の分娩がありますね。

比嘉：私達より我那霸師長の方が忙しいです。

宮崎：そうですよね。看護師であり助産師でもありますから。

我那霸：すべての分娩に私達が入るというわけではなくて、病棟が2つに分かれている病院なので、
その全員の中で情報を取りながら業務を調整して、
分娩が多いなとか、対応が必要だなという時は、
私がリーダーになって分娩係に連絡したりします。

比嘉：入院患者のお世話をありますよね。切迫流産の方やつわりがひどい方もいますし。私も今妊娠中なんですが、つわりがひどくて苦労しました。

———診療を行う上で心がけていることはありますか？

比嘉：私はこの仕事は接客業だと思っています。
学生の頃に接客業のバイトをしていたことも関係していると思うんですが、たくさんある病院の中から
患者さんがここを選び、そして私の外来に来てくれてよかったですと思えるような対応をしようと心がけて
います。

宮崎：もう、心構えが素晴らしいです。

比嘉：ちゃんとできていたらうれしいです。

我那霸：産婦人科は特に、患者さんの気持ちとして
考えたら、医師が同じ女性っていうのも安心で
すよね。

比嘉：それは感じますね。患者さんは絶対ベテランの先生方に診てもらった方が本音は安心だろう
なと思っていたんですが、わざわざ経験年数の浅い私の外来がいいって来てくれる方がいたんです。
その時は本当にありがたいなと思いましたね。女性医師がいいという希望は結構ありますね。

宮崎：それはホントにそうだと思います。

比嘉：ただ、だからといって産婦人科が女性医師ばかりだと、実際には業務が回らないですよね。

ライフステージの中でどうしても産休や育休を取るだろうし、実際に私も育休でまた1年休む予定がありますし。婦人科のがんの患者さんの場合は特に、ずっと同じ先生が診た方が絶対にいいと思いますね。そう考えると主治医は男性医師の方が安定していくいいんじゃないかな。

宮崎：そうですかね。産婦人科での出産もそうですし、婦人科では患者さんの年齢が幅広くて、若い患者さんの場合は親御さんも特に心配されると思います。その辺は常にこまやかな配慮を忘れないようになっていますね。

比嘉：それはとても大切なことだと思うな。我那覇師長は何か心がけていることはありますか？

我那覇：患者さんが本音を言てるかなという点ですね。ちょっとした痛みとか不安は、「ナースコードは鳴らさなくていいかな」という遠慮があると思うんですね。自分が入院した時も「看護師さんたちがすごい忙しそうだな」って気を遣っていたので、お世話をする側が業務に追われて忙しい態度を出さないよう気を付けています。

比嘉：患者さんに距離が近い立場だからこそその視点ですね。すごく勉強になります。

――――ご自分が子を持つ親であることは医療の現場でどう生かされていますか？

宮崎：夫として親として、患者さんの心情をより深く理解しやすい気がします。うちの子は、1人目は初期研修中に生まれたんですけど、その時は自分が産婦人科を回っている時じゃなかったので、比嘉先生に取り上げていただいて。立ち会いをしたんですが、もう本当にすごい感動しましたね。それがきっかけで産婦人科に決めたというのもあると思います。

比嘉：2人目のお子さんは自分で取り上げたんだよね。

宮崎：はい。ただ、2人目は前置胎盤でリスクがあって、途中までは僕が診て、ハートライフ病院では



扱えないケースで別の病院に移り、最終的にまたうちに戻って來たので、なんとか自分で取り上げることができました。この世で一番初めに我が子に触れられるなんて、産婦人科医にしか経験できないことですよね。

我那覇：そうですよ。本当に感動的な瞬間だと思います。

宮崎：家では今でもよく、「下の子はお父さんが取り上げたんだよ」と話すんですが、上の子には「なんでボクは取り上げてくれなかったの？」と言われちゃいますね（笑）。

比嘉：私が取り上げちゃってごめーん（汗）。

一同：（笑）

比嘉：そういえば、宮崎先生はあれから前置胎盤の患者さんやご家族への配慮が深くなったよね。

宮崎：そうなんです。妻が入院している2か月間は子どもと2人きりの生活で、仕事をしながら子どもの世話もしていたので本当に大変でした。だから切迫流産の患者さんだけでなく、ご主人に対してもすごく気持ちがわかる。その上、コロナで出産の立ち会いができないとか、忙しくて外来にもなかなか来られないとか。そんなお父さんたちのもどかしい気持ちを汲み取って、優しく接したいな

“これからパパやママになることを考えている研修医にはおすすめの職場です。育休や産休も取りやすいですよ。”

と思うようになりました。

——医療従事者は忙しいイメージがありますが、仕事と子育てや家事などのワークライフバランスをどのように取られていますか？

我那霸：私は育児が上手な母親ではないと思いません。ただ、家に仕事をできるだけ持ち帰らないこと、家では子どものことだけを考えて、いつも見てるよとか話を聞こうという姿勢は大切にしています。子育ては1人ひとり違うので、自分の価値観を妊婦さんとか患者さんに押し付けるようなことはしませんね。ただ、お母さんたちのがんばりや悩みはすごく共感できます。

宮崎：ハートライフ病院はめちゃくちゃ働きやすいです（笑）。子供の急病で休まなければならぬ時もすごく理解してくれるし。

比嘉：ハートライフ病院には病児保育があります。

少しの熱なら預かってもらうことができるので安心です。あとは私のつわりがひどい時やお腹が張ってしんどい時も、上司が産婦人科医なので言いやすいし理解してもらいやすいです。

宮崎：比嘉先生のところは夫婦でハートライフ病院ですよね。

比嘉：そうそう。夫は循環器内科ですごく忙しいんですけど、ハートライフ病院産婦人科は子育て医師でも働きやすいと思います。これからパパやママになることを考えている研修医にはおすすめの職場です。育休や産休も取りやすいですよ。

チームで連携しながら 万全のサポート体制で臨む分娩

——ハートライフ病院では、産婦人科医と助産師、看護師のみなさんがスムーズに連携を図っ



オペを行う宮崎医師。産婦人科医になる前は「外科系にも興味があった」と話す通り、手さばきも鮮やか。研修医の先生が立ち会うオペでは、どんな手順を踏んでいるのか丁寧に説明しながら行う。



分娩控室で待機する妊婦さんを看護している我那霸師長。妊婦さんに親身に寄り添う助産師の存在は産婦人科医にとっても心強い存在だ。ハートライフ病院ではチームで連携しながら分娩に臨む。

て、チームで分娩などに対応しているとお聞きしました。具体的にはどんなふうに協力体制を取っているんですか？

我那霸：現在、助産師は 20 人で看護師が 16 人。産婦人科と婦人科を合わせて業務を行っていて、他にも乳腺外科、他科の患者さんも入院されています。産婦人科の先生方と連携を図る大きな作業はやはり分娩ですね。

比嘉：はい。すごく頼りにしています。分娩の際だけでなく、妊婦さんが病院に来たら、まずは助産師さんや外来の看護師さんがヒアリングを行ってくれて、チーム内で共有するところから始まってますね。

宮崎：それと、懸念材料がある妊婦さんにはみんなで注意をしたりしていますよね。

比嘉：そうそう。そういったことも助かりますね。陣痛は何時間もかかるのがほとんどなので、通常の分娩であれば、その時は助産師さんがメインで妊婦さんをケアしてくれて、胎児の心音が落ちてきたりとか、いよいよ生まれそうになったとか、何か処置が必要なタイミングでドクターが入ります。

我那霸：同じ日に最大で 7 人の赤ちゃんが生まれたことがありましたね。帝王切開も入れて。

宮崎：確か月 60 人とか 70 人、取り上げたこともありますよね。年間で 700 人ぐらいの時もありましたね。

比嘉：新しい病棟ができたら一気に分娩も増えたよね。産婦人科の外来をやってると、「どこが少子化なんだろう」って思うことがありますね（笑）。

我那霸：今日はお産が多そうだと思ったら、リーダーが判断して分娩係の助産師を増やして、1人の受け持ちは 2 人までにしています。あとは分娩の進行状況に応じて判断して進めていきます。

比嘉：我那霸師長のようなリーダーが妊婦さんの状況を把握しながら、産婦人科の 5 人の医師の外来や手術の状況なども確認して、どの先生がお産に立ち会えるか、連携を取って動いてくれています。いないと業務が回りませんね。

宮崎：ホントそうですよね。

我那霸：出産までは 37 ~ 40 週と結構長くかかるので、勤務表では先々のことまで読めません。まずは一旦、助産師や看護師を平均的な人数で組んで、あとは臨機応変に状況を判断して、安全に分娩できるよう助産師・医師の配置を調整します。

比嘉：私の場合、産婦人科の知識が乏しい研修医の時に、分娩介助を実際に現場で教えてくれたの

“僕らが細かくケアできないところにも目を配り、 フォローしてくれる。本当に助かります。 チーム医療だからできることだと思いますね。”

は助産師さんだったので、分娩時に一緒にいてくれると精神的にすごく安心できます。相談もしやすいし、通常の自然分娩に関しては助産師さんの方が圧倒的に経験数が上ですからね。

宮崎：助産師さんも外来の看護師さんも患者さんからいろいろ情報を集めてくれて、医師に共有してくれます。僕らが細かくケアできないところにも目を配り、フォローしてくれる。本当に助かります。チーム医療だからできることだと思いますね。

——仕事のやりがいを感じる時はどんな時ですか？

比嘉：通常の分娩で無事に赤ちゃんを取り上げて「ありがとう」と感謝された時や、婦人科のがん患者さんとの信頼関係を築けた時ですね。がんは5年で寛解とされますが、その後も定期的に検査や診察が必要で長いお付き合いになります。私が県外や他の出先機関で研修を終えて戻ってきた時に、婦人科のがんの患者さんが、「先生待ってたよ」と言ってくれるのは医師冥利に尽きます。

宮崎：比嘉先生はリピーターの妊婦さんも多くて、同じ妊婦さんで4人目まで全部比嘉先生が取り上げたこともありますよね。

比嘉：そうそう。意外といいるかもしれない。ずっとハートライフに来てくれるとありがたいなって思う。

宮崎：僕の場合は研修でいた友愛医療センターから、わざわざハートライフに移って来てくれたりする人がたまにいて、とてもうれしいです。婦人科の方で腫瘍の患者さんと信頼関係ができる声をかけたりすると、頑張ろう！って思えます。

我那霸：私のやりがいは、赤ちゃんが生まれて家族が増えるその瞬間に立ち会えること。いつも感動してうれしくなります。

比嘉・宮崎：うんうん、わかります！

「部署間研修制度」を活用してさらなるスキルアップも目指せる

——研修プログラムの基幹病院として、比嘉先生は山口大学附属病院で、宮崎先生は友愛医療センターで研修を受けたとのことですが、どのような収穫がありましたか？

比嘉：山口大学附属病院は産婦人科センター長である武田先生の母校であり、かつての勤務先でもあることからご紹介いただきました。ハートライフとの大きな違いはNICUがあることと婦人科の腹腔鏡手術の症例の多さです。NICUがないハートライフでは、いつも他の病院にお願いする側でしたが、山口での研修では受け入れる側の病院とし



ての経験ができました。搬送する側、受け入れる側、両方の心情や考え方、状況などもわかるようになつたのは貴重な体験でよかったなと思いました。

宮崎：お互いに理解が深まった方がお願いもスムーズになりそう。

比嘉：絶対にそうだと思う。あとは山口大学附属病院が「双胎間輸血症候群」の治療ができる病院だったので、双子や三つ子など、多胎児の妊婦さんの入院管理を数多く経験することができました。1つの胎盤を双子などの胎児2人が共有している場合、血液の循環バランスが崩れて、血液量に差が出て、発育に問題があることがあるんですが、この病院では内視鏡を羊水の中に入れて、胎児の状態でレーザー治療を行うことができましたね。

宮崎：最先端の治療ですよね。

比嘉：そう。ただ、その中で厳しい命の選択が迫られる事も多く、辛い気持ちにもなりましたね。三つ子の場合、1人の心拍が止まってしまったけれど、妊娠を継続するかどうかを決めなければならなかったり。

宮崎：本当に辛い選択です。

比嘉：山口へ行かなければできなかった尊い経験でした。宮崎先生はどうだった？

宮崎：僕は専攻医を目指すにあたり、県内に3つある基幹病院のひとつである友愛医療センターで研修プログラムを受けました。うちの病院よりも婦人科の腫瘍の症例が多くて、経験できないような大きな手術もありましたね。婦人科の中では大きな「広汎子宮全摘術」に入ったんですが、その先生がどこを攻めてどこを引くか、これ以上やつたら合併症が出て危険だからやめるとか、引き際がすごく上手な先生で、本当に勉強になりました。ハートライフではやっていない不妊治療のカンファレンスなども経験できました。

——我那覇師長は希望者がスキルアップのために所属する部署とは別の部署で研修できる「部署間研修制度」を活用し、救急外来で研修されたとのこと。どんな理由からだったんでしょうか？

我那覇：お産では妊婦さんの容態が急変することがあるので、急変のサインをできるだけ早めに捉えて行動できるようになりたいと思いました。実際には救急車で搬送されたり、歩いて外来に来た方を介助したり、造影剤を使うカテ室やCTなどの検査だったり、最終的にはドクターカーに同乗して病院外での救急活動など、そういう救急外来の業務を全般的に経験させてもらいました。最初は1年の予定でしたが、技術や経験の習得に時間がかかり、結局2年半近くになりました。

比嘉：現場でどんなことが生かされていますか？

我那覇：お産も救急と似ていて、陣痛とか出血とか、





突然始まることが多くて、緊急手術についても常に優先順位を付けて考えないといけない。胎児の心音が落ちたり、いろんな状況になった時にも、同じ行動を同じ人がやらないよう、すぐに役割分担をして迅速に対応する。それは救急と同じだと思いますね。

宮崎：研修医の先生方とも仲良くなつたそうですね。
我那霸：そうなんです。私は長年ずっと産婦人科領域で仕事をしていたので、初めて救急の仕事に触れて、できなくて悔しかったり、知識不足を感じることも多くありました。教わる側の気持ちや初めて挑戦する人の気持ちを思い出し、研修医の先生方とは現場で慰めあつたりして、とても仲良くなりました（笑）。

比嘉：ハートライフ病院らしい、すごくいい話ですね。

研修医時代の2年間は貴重 やりたいことは何でも挑戦すべし！

——研修医の先生方を受け入れる際に心がけてることはありますか？

比嘉：自分の研修医時代を振り返ると、各科を回る時は医療の知識を学ぶというよりは、いろいろ

な先生方の下で患者さんとの接し方やがんの告知の仕方をはじめ、合併症が起きてしまった時の患者さんや家族の方への説明などがすごく勉強になりました。なので私も研修医には「先生によっていろいろな対応や説明の仕方があるから、それをよく見て自分ならどれがいいか決めたらいいよ」と伝えています。

宮崎：確かに。がんの告知だけでなく、治療に対する考え方も先生によっていろいろですよね。

比嘉：宮崎先生は研修医の指導がすごくていねいだよね。教え方が一番うまいと思う。

宮崎：え、ホントですか？研修医を受け入れる時は、なるべく飽きさせないようにしようとは思ってますね。

比嘉：宮崎先生は手術もうまいし、今どんなことをしているかをちゃんと説明しながら手術ができるから、研修医は一緒に手術していてよくわかるし、おもしろいと感じてくれると思うよ。

我那霸：私は研修医の先生が今どこにいるのか、外来に付いてるのかなどの把握、心配りをするようにしています。もし分娩があったら、立ち会いたいと言っていた先生に声をかけて見学や立ち会いをしてもらったりもします。

——最後に医師を目指す医大生や研修医の先生にメッセージやアドバイスをお願いします。

宮崎：研修医時代は、まずは救急外来や当直での対応がメインになってくると思うんですけど、僕は正直救急が苦手なところがありました。でも、その時に経験した初期対応が今でも現場で生かされていて力になっています。なので、救急での研修をしっかりとがんばってください！

我那霸：救急の初期対応は大事ですよね。

比嘉：我那霸師長がおっしゃると説得力ありますね。私のアドバイスは、元々進みたかった放射線科の教授からいただいた言葉を紹介したいです。その先生から「必要ないとかムダだとか思い込ん

でいた仕事でも、一生懸命やっているとそれが自分のキャリアになるよ」と言われて、目が覚める思いがしたというか。産婦人科は最初の目標とは異なっていたけれど、初期研修の2年間でがむしゃらに勉強していたら、自分の中では大ヒットとなって産婦人科医になり、ここで力になっています。自分に必要なのはこれだけって決めつけずに、何でも一生懸命やった方がいいよね?

宮崎:確かにそうですね。ただ、僕も我那覇師長みたいに、例えば別の科でも勉強してみたいなという思いもあります。

比嘉:ハートライフ病院ってその辺が柔軟だからいいよね。

我那覇:本当にそう思いますね。

宮崎:研修医時代はありがたさに気が付かなかつたけど、2年間いろんな科を自由に回れる研修期間って実は相当貴重だし、恵まれてるんですよね。

比嘉:その通り!研修医の特権を思う存分生かして欲しいよね。

我那覇:自分のやりたいことには何でもチャレンジ



して欲しいです。ハートライフ病院だと、自分が目指している科の先生方や看護師にも「こんなことがやりたいんです」って話しておくと、みんなが協力してくれてチャンスが巡ってきますよ。

比嘉・宮崎:特に産婦人科へのチャレンジ、待ってまーす! (笑)





女性の一生を通して トータルケアで寄り添い続ける

———産婦人科センターの主な業務を教えてください。

産婦人科では妊娠・分娩・手術の診療を行い、妊娠初期から後期、分娩、産後までを、産婦人科医と助産師、そして看護師が緊密に連携しトータルでサポートしています。私は婦人科の腫瘍系やがんの専門医でもあるため、婦人科での対応も多いですね。良性の卵巣腫瘍や子宮内膜症、子宮筋腫に対する腹腔鏡下手術、若い女性のホルモン分泌異常や更年期女性のヘルスケア領域、子宮脱や膀胱直腸瘤などの性器脱にも対応しています。子宮頸がんや、前がん病変に対して行う「レーザー蒸散」は、県内では他院ではまだ少ない治療です。切除手術が一般的な子宮頸がんや前がん病変をレーザー蒸散で焼き切ることで、出血が少なく、術後の妊娠時の流産や早産のリスクも抑えるとされています。入院せずに30分程度で外来治療ができ、患者さんの身体への負担も少なくて済みます。

———連携する病院での「産婦人科専門研修プログラム」もあるそうですね。

昨年までハートライフ病院の初期臨床研修を受けていた医師が現在、プログラムの基幹病院である友愛医療センターで研修中です。当院だけでは経験できない症例や手術、手技が豊富に体験できます。また、周産期の症例だけでなく、不妊内分泌系や悪性腫瘍の化学療法、緩和ケアなど、さまざまな分野を学ぶことができます。

———産婦人科・婦人科の医師にはどんな心構えが必要でしょうか。

産婦人科では赤ちゃんの状態について、時に深

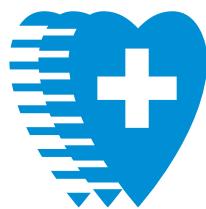
刻な告知が必要だったり、婦人科では患者さんにがんの告知をすることもあります。時間をかけた丁寧な説明や、患者さんの気持ちに寄り添ったディリケートな対応が求められます。

———研修医を受け入れる際に大切にしていることはなんですか。

「産婦人科は大変そう」というイメージを持たれがちですが、当院では業務や当直の負担などが研修医に集中し過ぎないよう、指導医や上級医がしっかり調整しています。大規模の大学病院などとは異なり、研修医の数が適度なので、上級医が受け持つ患者の手術や帝王切開なども一緒にでき、症例数が充分経験できます。医局の雰囲気もアットホームで、病院全体で研修医を見守り育てるムードがあります。

———最後に医学生や研修医にメッセージをお願いします。

一昔前と比べ、産婦人科を取り巻く環境も大きく変わり、日本産婦人科学会では激務のイメージがあった産婦人科医の労働環境の改善に力を入れています。当法人は、「沖縄県ワーク・ライフ・バランス企業認証制度」の認証企業です。職員のメンタルヘルスケアのための環境づくりや有給休暇の推奨、育休・産休からの復帰なども手厚くサポートされており、女性医師の復帰率についても高いと感じます。仕事と家事や育児の両立、プライベートライフの充実、柔軟な働き方ができる職場だと思います。産婦人科医は新しい命に出会える意義のある仕事です。多くの医学生、研修医が興味を持ち、目指してくれることを期待しています。



社会医療法人かりゆし会
ハートライフ病院

所 在 地 〒901-2492
沖縄県中頭郡中城村字伊集 208 番地
ホームページ <https://www.heartlife.or.jp/hospital/>

病床数 **308** 床 診療科数 **32** 科

特 徴

当院は地域医療支援病院であり 24 時間の救急医療を提供。
32 の診療科に加え、各種専門外来、内視鏡センターや予防
医学センターのほかにも沖縄県内で骨髓移植を完結できる
「無菌治療センター」などの専門治療を行う中核病院です。



採用情報



臨床研修医 HP